Association of Disability Sciences, Japan

障害科学研究, 32, 11－19, 2008

原　著

聴覚障害幼児の象徴遊びと母子相互作用の発達に関する研究

館山　千絵*・鄭　　仁豪*・松本　末男**

本研究では、音声言語を主なコミュニケーション手段とする２～４歳の先天性聴覚障害幼児における象徴遊びと母子相互作用の発達的特徴を検討した。研究の結果、聴覚障害幼児の象徴遊びは、年齢が上がるにつれて、より高次なレベルの遊びへと発達すること、健聴児の発達傾向と比較すると、２歳児ではやや遅れる傾向があるものの、３～４歳児ではほぼ同等の発達レベルに達することが示された。象徴遊び場面における母子相互作用においては、聴覚障害幼児による言語的相互作用が増加する傾向にあること、一方、聴覚障害幼児と健聴母親による動作的相互作用は、聴覚障害幼児の言語的相互作用の増加にもかかわらず、一定割合で維持される傾向があることが示唆された。また、聴覚障害幼児と健聴母親との言語的相互作用には、オノマトペーや模倣といった、健聴児には示されなかった特徴的なカテゴリパターンが見られた。

キー・ワード：象徴遊び　聴覚障害幼児　母子相互作用

Ⅰ．問題と目的

子どもにおける遊びは、行動自体の楽しみのために自由で自発的に行う行動であり（岡本・清水・村井, 1995）、子どもの自我、もの、世界についての知識やコミュニケーションが劇的に拡大する時期に頻繁に出現することから、子どもの発達に関する情報源になるとされる（Spencer, Deyo, & Grindstaff, 1991）。遊びの中でも、ふり遊びやごっこ遊びなどの象徴遊びは、象徴機能の初期の表れであり、子どもの表象の世界を形成し、言語の発達を支えるものである（大島・藤野, 2001）。

健聴児の象徴遊びは、１歳前後に食事場面などの日常生活に密着した遊びとして発生し、２歳前後には、言葉の発達に伴い、他者へ向けられた遊びとして増えていくとされる（戸田, 1996）。

一方、聴覚障害児の象徴遊びについては、言語的な面を除けば、健聴児との質的な違いはみられないものの、遊びの量は少ないことが指摘されている（Mann, 1985）。他にも、言語力の低い聴覚障害児に比べて、言語力の高い聴覚障害児の象徴遊びが多様であること（Casby & McCormack, 1985）、聴覚障害児と母親との間のコミュニケーションに着目し、聴覚障害母親を持つ聴覚障害児と健聴母親を持つ健聴児とでは、象徴遊びにおける質的・量的な違いはないことが報告されている（Spencer et al., 1991）。

また、高度聴覚障害幼児では、音声言語発達の遅れはみられるものの、象徴遊びの開始時期は、健聴児と比較して、遅れはみられないとの報告（中島・小出・大森・中川・野中・長野・高橋・高橋・川野, 1986）や、聴覚障害児の象徴遊びの発達は、言語的象徴行動による発達だけでなく、動作的象徴行動による発達においても、生活年齢に比べて、遅れる傾向があるとの報告が見られる（大島ら, 2001）。

さらに、生後まもない時期から行われる母子

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
** 筑波大学附属聴覚特別支援学校

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

遊びは、その後の子どもの発達の基礎を作っていくために重要な要素であるとされている（田中, 1996）。母子遊びと象徴遊びとの関連については、母親が積極的に遊びに関わることにより、乳幼児の象徴遊びのレベルが高められること（Slade, 1987）、子どものひとり遊びに比べ、母親と一緒の遊びが象徴遊びの質的変化をもたらすことが示唆され（Fiese, 1990）、母親の関わり方が、子どもの象徴遊びの発達に影響を及ぼす可能性が指摘されている。

このように、聴覚障害児の象徴遊びに関する先行研究では、異なる聴覚障害児を対象としており、象徴遊びの発達について、様々な知見が報告されていることに加え、象徴遊びに影響を及ぼすと考えられる対象児のコミュニケーション方法などを考慮した検討が十分とは言い難い。また、象徴遊び場面における健聴母親と聴覚障害児との相互作用に関する情報もほとんど提供されていない。

そこで本研究では、音声言語を主なコミュニケーション手段とする先天性聴覚障害幼児の象徴遊びの発達傾向やその特徴を、健聴母親との自由遊び場面を通して明らかにすることを目的とする。また、遊び場面における健聴母親と聴覚障害幼児との相互作用の発達的特徴について検討を行う。

Ⅱ．方　法

象徴機能とは、現実の世界の事物や事象を、それら自体ではなく、それらを代理するものへと思考を媒介にして変換し、シンボルで指し示す心の働きであり（中島・安藤・子安・坂野・繁桝・立花・箱田, 1999）、象徴遊びも象徴機能の出現を示唆するものであるとされる（外山, 2005）。本研究では、このような定義に基づき、聴覚障害幼児が健聴母親との自由遊び場面の中で、現実の事物や出来事を、別の事物や自らの動作で置き換える象徴機能が示されたとき、象徴遊びが成立したとみなした。また、象徴遊びの中で示される、健聴母親と聴覚障害幼児の全ての言語的及び動作的行為を母子相互作用とみなし、分析の対象とした。なお、本研究では、聴覚障害幼児の年齢上昇にともなう象徴遊びレベルと母子相互作用の内容の変化から発達を捉えた。

1．対象児

聴覚障害を主たる対象とする特別支援学校幼稚部に通う先天性聴覚障害幼児２歳児７名、３歳児11名、４歳児10名の計28名であった。対象児は、両耳または片耳に補聴器あるいは人工内耳を装用しており、聴力レベルは60dB～130dBであった。対象児の内訳をTable 1に示す。

Table 1　対象児の内訳

対象	人数	平均月齢（SD）	聴力レベル
2歳児	7	31（3.96）	80～130dB
3歳児	11	44（3.38）	80～130dB
4歳児	10	56（3.55）	60～120dB

2．データ収集

幼稚部の教室において、朝の活動が始まる前の約30分間、集団遊び場面における健聴母親と聴覚障害幼児との自由遊びの様子を、DVカメラ４台を用いて記録した。

3．分析内容

聴覚障害幼児と健聴母親による象徴遊びと母子相互作用について、次のような分析を行った。

（1）象徴遊びの分析

象徴遊びの発達傾向を分析するために、各学年における象徴遊びレベルの評価と年齢別変化を分析した。

象徴遊びレベルの評価には、先行研究（McCune-Nicolich, 1981；Westby, 1991）を参考に作成した「象徴遊び評価表」（Table 2）を用いた。なお、象徴遊びレベルの判断は、「象徴遊び評価表」に準拠し、聴覚障害幼児が示した象徴遊びの中で最も高いレベルのものを、その子の象徴遊びレベルとし、レベルⅠからレベルⅧまでの８つのレベルの中の１つに分類した。

象徴遊びレベルの年齢別変化は、象徴遊びにおけるレベルⅠを１点、レベルⅡを２点、同様

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Table 2　象徴遊び評価表

象徴遊びレベル	定　　義
レベルⅠ	日常的によく知る活動（食べる、寝るなど）の単一のふり活動
レベルⅡ	２つの行為を組み合わせる（ポットからカップに注ぐなど）活動
レベルⅢ	より長い行為の連続や道具を用いて日常経験を詳細に表象する
レベルⅣ	一連の流れに沿って表象する
レベルⅤ	役割を自分の中に移行する
レベルⅥ	高い創造的活動をする。人形と役割を交替する
レベルⅦ	小道具や場面を作り出すために言語を使用する
レベルⅧ	遊びの中で役割・活動を整えるために言語を使用する

に、レベルⅧを８点と換算し、各年齢における平均値を求め、年齢別変化を分析した。

(2) 母子相互作用の分析

健聴児の母子相互作用に関する先行研究（Dore, 1978；武井・荻野・大浜・斎藤, 1984）を参考に、主に音声と手話による相互作用を表す言語的相互作用カテゴリと主に身体的動作による相互作用を表す動作的相互作用カテゴリからなる聴覚障害幼児用の「母子相互作用カテゴリ表」（Table 4, Table 5 参照）を作成し、聴覚障害幼児と健聴母親との相互作用を分析した。

なお、自由遊び場面における象徴遊びの生起時間には個人差が見られたため、各幼児における１分あたりの母子相互作用の出現頻度を求め、象徴遊びの生起時間を10分に換算し、母子相互作用の分析を行った。

Ⅲ. 結　果

象徴遊びレベルの評価は、本研究者と児童心理学を学び、子どもの発達に関する基礎的知識を有する大学院生１名の２名による一致率を求めた。その結果、象徴遊びレベルの評定に関する一致率は77.4％であった。一致しなかった部分については、協議の上で再評定を行い、90.3％の一致率を得た。遊びの内容の判断が困難であり、最終的に評価ができなかった9.7％については、今回の分析から除いた。

また、母子相互作用については、最初に本研究者が分類を行い、判定の困難なものについて、児童心理学を専攻する大学院生を交えて協議の上、最終的な分類を行った。

1. 象徴遊びに関する分析

２歳～４歳の聴覚障害幼児の象徴遊びレベルの結果をTable 3 に示した。各年齢の平均値について分散分析を行った結果、年齢の差は有意であった（$F(2,25)=59.58$, $p<.01$）。LSD 法を用いた多重比較によると、４歳児の象徴遊びレベルは、２歳児と３歳児の平均に比べると、有意に高く、３歳児の象徴遊びレベルは、２歳児の平均よりも有意に高かった（MSe=0.69, ５％水準）。

Table 3　対象児の象徴遊びレベル

象徴遊びレベル／対象	２歳（7人）	３歳（11人）	４歳（10人）
レベルⅠ	2	0	0
レベルⅡ	1	0	0
レベルⅢ	4	0	0
レベルⅣ	0	2	0
レベルⅤ	0	0	0
レベルⅥ	0	7	4
レベルⅦ	0	2	6
レベルⅧ	0	0	0
合計点数	16	64	66
平均（SD）	2.29 (0.88)	5.82 (0.94)	6.60 (0.49)

1. 各レベルにおける数字は該当対象児の数を示す.
2. 合計点数は，レベル点×人数の総和である.

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

2．母子相互作用に関する分析

(1) 聴覚障害幼児の相互作用に関する分析

聴覚障害幼児が行った言語的および動作的相互作用の出現頻度をTable 4とTable 5に示した。

言語的相互作用における年齢別出現頻度について、χ^2検定を行った結果、年齢間の出現頻度の偏りは有意であった($\chi^2(2)=10.21$, $p<.01$)。ライアン法を用いた多重比較によると、2歳児と3歳児、3歳児と4歳児の間に有意な差はなかったものの、4歳児の言語的相互作用は、2歳児に比べて有意に多かった(5%水準)。動作的相互作用における年齢別出現頻度ついて、χ^2検定を行った結果、年齢間の出現頻度の偏りは有意ではなかった。

言語的相互作用と動作的相互作用のそれぞれのカテゴリにおける年齢間の出現頻度の偏りについてχ^2検定を行った結果、いずれのカテゴリにおいても年齢間の出現頻度の偏りは有意ではなかった。

(2) 健聴母親の相互作用に関する分析

健聴母親における言語的及び動作的相互作用の出現頻度をTable 4とTable 5に示した。上述

Table 4　言語的相互作用

言語カテゴリ	健聴母親			聴覚障害幼児		
	2歳	3歳	4歳	2歳	3歳	4歳
行動提案	1.7	3.4	4.4	0.0	0.3	0.0
説明要求	0.8	4.1	6.1	0.0	0.1	0.1
聞き返し	2.3	2.7	3.1	0.0	0.1	0.2
注意喚起	0.0	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0
禁止・拒否	1.9	1.5	0.7	0.0	0.1	0.4
教示・報告・説明	2.7	5.5	5.2	0.0	0.8	2.8
説明要求への答え	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	1.7
内的表出	3.8	5.4	4.0	0.0	0.6	1.3
受容・理解	0.0	0.8	1.1	0.0	0.1	0.4
決まり文句	3.3	2.3	1.2	1.0	0.0	0.4
代弁	15.3	11.1	8.2	0.0	0.0	0.0
無意味発声	0.0	0.0	0.0	0.1	0.6	0.4
もの・行動の名称の言語化	3.1	3.1	3.2	0.0	0.5	0.3
オノマトペー	10.7	5.4	2.8	0.0	0.4	0.9
模倣	0.0	0.0	0.1	1.1	0.8	4.2
発声の伴わない手話言語	0.0	0.0	0.0	0.2	1.7	0.4
聞き取れない発声	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	2.2
その他	0.4	0.0	0.5	0.0	0.0	0.1
合　計	46	45.4	41	2.4	8.3	15.8

数字は一人あたりの出現頻度

Table 5　動作的相互作用

動作カテゴリ	健聴母親			幼児		
	2歳	3歳	4歳	2歳	3歳	4歳
視線	0.0	0.0	0.0	3.5	7.0	3.7
リーチング	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0
受け取り	0.2	0.0	0.0	2.5	0.7	0.4
差し出し	2.3	0.5	0.9	4.1	3.6	3.8
物の操作	3.1	0.1	0.3	1.1	2.0	0.6
身振り	4.1	2.9	2.2	1.4	1.8	2.3
受容・理解	0.9	0.9	0.7	0.9	4.4	5.4
拒否	1.2	0.5	0.4	0.4	0.8	0.5
指さし	1.5	3.1	1.6	1.4	1.4	0.8
その他	0.0	0.0	0.1	0.4	0.4	0.1
合　計	13.3	8.0	6.2	16.4	22.1	17.6

数字は一人あたりの出現頻度

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

の聴覚障害幼児の相互作用に関する分析と同様、言語的相互作用における年齢別出現頻度について、χ^2検定を行った結果、年齢間の出現頻度の偏りに有意な差はなかった。また、動作的相互作用における年齢別出現頻度についてχ^2検定を行った結果、年齢間の偏りに有意な差はみられなかった。

言語的相互作用と動作的相互作用のそれぞれのカテゴリにおける年齢間の出現頻度の偏りについてχ^2検定を行った。その結果、「オノマトペー」において年齢間の出現頻度の偏りに差がある傾向が示された（$\chi^2(2)=5.15$, $p<.10$）。その他の言語的相互作用カテゴリにおける年齢間の出現頻度の偏りには、有意な差は見られなかった。動作的相互作用では、「物の操作」において年齢間の出現頻度の偏りに差のある傾向が見られた（$\chi^2(2)=4.82$, $p<.10$）。その他の動作的相互作用の各カテゴリにおける出現頻度の偏りには、差が示されなかった。

Ⅳ．考　察

本研究では、健聴母親との自由遊び場面において示される聴覚障害幼児の象徴遊びの様子を分析することにより、聴覚障害幼児における象徴遊びの発達傾向やその特徴、母子相互作用の発達的特徴を明らかにすることを目的とした。

1．象徴遊びの発達について

年齢毎の象徴遊びレベルの変化をFig. 1に示した。各年齢における象徴遊びレベルの平均値は、2歳児は2.29点、3歳児は5.82点、4歳児は6.60点であった。このように、聴覚障害幼児における象徴遊びレベルは、年齢毎のレベルの差が示されており、年齢があがるにつれて、より高次なレベルの象徴遊びが出現する傾向が示された。また、健聴児の象徴遊びレベルに関する先行研究（Westby, 1991）によると、2歳児の象徴遊びレベルはレベルⅢ～Ⅳ、3歳児の象徴遊びレベルはレベルⅤ～Ⅵ、4歳児の象徴遊びレベルはレベルⅦである。本研究における聴覚障害2歳児の平均は、Westby（1991）の示した健聴2歳児の象徴遊びレベルよりもやや遅れる傾向が示された。また、本研究の聴覚障害3歳児と4歳児の象徴遊びレベルは、健聴児における3歳児と4歳児の平均的象徴遊びレベルに達していると推察できる。

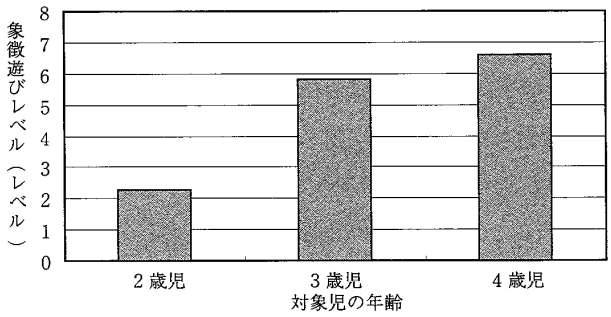

Fig. 1　象徴遊びレベルの年齢別変化

本研究の結果示された聴覚障害2歳児における象徴遊びレベルの遅れの原因については、本研究では明らかにできなかった。しかしながら、このような遅れの原因の一つに音声言語受容における制約をあげることができよう。象徴遊びを支えている象徴機能は、様々な経験により発達するとされる（高橋, 1984）。2歳以前の聴覚障害幼児は、程度の差はあるものの聴覚的経験に制約を有することになる。本研究においても、象徴遊び場面における聴覚障害2歳児の言語的相互作用は極めて少なく、主に動作的相互作用に依存していることが窺える。このような音声言語による経験や表出の制約が、象徴遊びレベルの遅れとして示される可能性が考えられる。

一方、聴覚障害3歳児と4歳児では、健聴の3・4歳と同等な発達レベルが示されている。象徴遊びは、言葉の発達に伴い、他者へ向けられたものとして増えていくとされる（戸田, 1996）。本研究の結果においても、2歳児と4歳児では言語的相互作用における明らかな違いが示されているように、聴覚障害幼児における言語的相互作用の増加にみられる言語的発達が象徴遊びレベルの向上に繋がっている可能性が考えられる。このような言語的発達を支えているものが幼稚部における言語指導と考えられる。

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

2．母子相互作用の変化について

本研究の聴覚障害幼児では、健聴児における母子相互作用にはみられなかった言語的相互作用カテゴリが観察された。したがって、それらを聴覚障害幼児の母子相互作用における固有のカテゴリと考え、以下のような分析カテゴリを新しく作成した（Table 4，Table 5）。

聴覚障害幼児と健聴母親の両方にみられた新しい相互作用カテゴリは、「ものや行動の名称の言語化」、「オノマトペー」、「模倣」であった。聴覚障害幼児の言語的相互作用にみられる「模倣」は、いずれの年齢でも多くみられていることから、幼稚部に通い始めた2歳児ですでに、健聴母親や教師の言葉を繰り返して言うことが教えられている教育的環境を反映しているものと考えられる。

聴覚障害幼児のみにみられた相互作用には、「無意味発声」、「発声の伴わない手話言語」、「聞き取れない発声」の3つであった。手話言語は、独り言のように行う単発の手話で、それに対して健聴母親は、その内容を音声化して幼児に働きかけるという特徴的反応が示された。また、無意味発声は、健聴母親の働きかけに対する返答ではなく、「あー」「うー」「ぶー」といった音声を発しているものであった。

健聴母親のみに見られたものは、聴覚障害幼児の代わりに言葉で指し示す「代弁」であった。実際の観察においても、代弁の仕方には年齢別に違った特徴がみられた。2歳児の健聴母親は、遊びの中で生じた幼児の行動を全て音声により言語化し、幼児に聞かせるように働きかけているが、3歳児の健聴母親は、幼児からの視線に対して、幼児の言いたいと思われることを言語化して働きかけを行っていた。4歳児の健聴母親は、幼児の自発的な言葉や言いたいと思われる言葉を文や文章のような完全な形にして示すという特徴がみられた。

聴覚障害幼児における言語的相互作用の出現頻度は、2歳児と3歳児の間には明らかな差はなかったものの、4歳児になると、明らかに増加する傾向が示された（Fig. 2）。中島ら（1986）

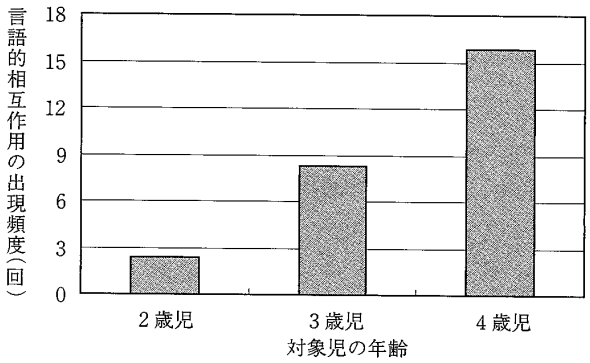

Fig. 2　幼児の言語的相互作用の年齢別変化

によると、象徴機能は、言語の発達を支える要因となると示唆されている。Table 2の象徴遊び評価表に示されるように、レベルⅦ及びレベルⅧの4歳児の象徴遊びは、言語使用が中心となっており、4歳児における言語的相互作用の増加は、象徴遊びの向上に深く関わっていることを裏付けるものと思われる。

また、聴覚障害幼児の言語的相互作用では、個々のカテゴリにおける年齢間の差は示されなかった。しかし、年齢が上がるにつれて、2歳児ではみられなかった「教示・報告・説明」、「説明要求への答え」、「内的表出」、「聞き取れない発声」、など、多くの言語的カテゴリが出現し、3歳と4歳に進むにつれ、増加する様子が示されており、このようなカテゴリ毎の軽微な増加が、結果的に2歳児と4歳児の言語的相互作用の違いをもたらしているものと推察できる。

聴覚障害幼児の言語的相互作用は、年齢が上がるにつれて増加する傾向を示している一方、動作的相互作用における年齢間の違いはみられない。これは、音声言語の使用頻度が増加しても、「指さし」、「視線」、「差し出し」といった動作的相互作用を併用し続ける傾向があることを示すものと思われる。

子どもにおける初期コミュニケーションモードには、音声による言語的コミュニケーションモードのほかに、表情、身振り、行動、関連事物や絵の呈示、指さしなどの動作的コミュニケーションモードが多く使われる（中野・齋藤，

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

1996)。本研究の結果示された聴覚障害幼児における動作的相互作用の一定数の維持は、言語的相互作用の不完全さを補うために、意味を持つジェスチャーを含めた多用なコミュニケーションモードを用いることを示唆するものと推察できる。

一方、健聴母親の相互作用を考えると、言語的相互作用全体における年齢別変化はみられなかったものの、「オノマトペー」カテゴリにおいては、2歳児の健聴母親が3歳児と4歳児の健聴母親に比べて、オノマトペーの使用が多く、全体的にオノマトペーの使用頻度が多いことから、聴覚障害幼児においてもオノマトペーが乳幼児期における言語理解と表出の基礎となっている(早川, 1973)ことを支持していると思われる。また、2歳児から3・4歳児にかけて、オノマトペーの活用が減少することは、2歳児の健聴母親は、多くのオノマトペーを使い言語的相互作用を行っているが、幼児の年齢の上昇にともない、「行動提案」、「説明要求」、「教示・報告・説明」などの他の言語的カテゴリを用いて、相互作用を行うことを反映しているものと推察できる。

また、聴覚障害幼児の言語的相互作用は年齢とともに増加しているにもかかわらず、健聴母親の言語的相互作用の頻度は、年齢による変化が示されない。これは、健聴母親の言語的相互作用が「オノマトペー」や「代弁」といった聴覚障害幼児の言語的カテゴリの増加に伴い減少するものもある一方、「行動提案」、「説明要求」、「聞き返し」、「教示・報告・説明」のように、聴覚障害幼児の相互作用に健聴母親が積極的に関わることにより、増加するものもあり、これらの増減の相殺により、変化が示されないことと推察できる。聴覚障害児の健聴母親は、聴覚障害児との言語的相互作用において、言語的遅れを補うために、より積極的に相互作用を試みるようである(Wedell-Monnig & Lumley, 1980)。

健聴母親が行った動作的相互作用においては、聴覚障害幼児の年齢に対応した変化はみられなかった。しかし、「物の操作」カテゴリにおいては、2歳児の健聴母親が、3歳児と4歳児の健聴母親より、「物の操作」カテゴリを多く用いることが明らかになった。物の操作は、オノマトペーと同様、その場で具体的に表出される、理解されやすい表現形式であり、低年齢において、言語的表出や理解が精緻化する前に多く用いられるといった特徴があると思われる。

総じて、聴覚障害幼児における母子相互作用の発達的特徴として、2歳児では物を媒介した動作的相互作用カテゴリが積極的に用いられ、4歳児では、主に言語を用いて相互作用が行われること、また、その移行期間と考えられる3歳児は、言語的相互作用を増やしつつ、指さしなどを交えた動作的相互作用が行われていると考えられる。

V. まとめ

本研究では、音声言語を主なコミュニケーション手段とする先天性聴覚障害幼児を対象とし、聴覚障害幼児と健聴母親との自由遊び場面を観察し、象徴遊びと母子相互作用の発達傾向やその特徴を検討し、次のような知見が得られた。

まず、音声言語を用いる聴覚障害幼児の象徴遊び発達は、年齢が上がるにつれて、より高次のレベルに発達していくことが明らかになった。その発達レベルにおいても、2歳では健聴児に比べてやや遅れる傾向があるものの、3歳になると、ほぼ同様の発達レベルに達することが示唆された。

次に、本研究の結果、聴覚障害幼児と健聴母親との相互作用では、主に健聴母親による「名称の言語化」と「オノマトペー」、主に聴覚障害幼児による「模倣」といった、健聴児の母子相互作用では見られない相互作用のパターンが観察された。

また、象徴遊び場面における聴覚障害幼児の言語的相互作用は、年齢とともに、増加する傾向が示された。聴覚障害幼児と健聴母親との相互作用には、動作的相互作用を一定数に維持し

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

ながら、言語的相互作用が増加していく様子がみられた。

今後、0、1歳児の母子相互作用の発達と特徴も合わせて検討する必要があると思われる。また、3～4歳児から多くみられる友達との遊びも、社会性発達の側面から、検討する必要があると思われる。

文　献

Casby, M. W. and McCormack, S. M. (1985) Symbolic play and early communication development in hearing-impaired children, *Journal of Communication Disorder*, 18, 67-78.

Dore, J. (1978) Conditions for the acquisition of speech act. In I. Markova (Ed.), *The social context of language*. John Wiley & Sons Press, New York, 87-111.

Fiese, B. H. (1990) Playful relationships : A contextual analysis of mother-toddler interaction and symbolic play. *Child Development*, 61, 1648-1656.

早川勝弘（1973）擬声擬態語の生成に関する一考察；幼児期を資料として．国文学，61，29-37.

Mann, L. F. (1985) Play behaviors of deaf and hearing children. In D. S. Martin (Ed.), *Cognition, education, and deafness*. Gallaudet University Press, Washington, D. C., 27-29.

McCune-Nicolich, L. (1981) Toward symbolic functioning : structure of early pretend games and potential parallels with language. *Child Development*, 52, 785-797.

中島誠・小出貞子・大森千代美・中川弘・野中信之・長野三郎・高橋伴子・高橋良光・川野通夫（1986）難聴幼児における認知の発達と言語発達．音声言語医学，27，209-214.

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（1999）心理学辞典．有斐閣，412.

中野善達・齋藤佐和（1996）聴覚障害児の教育．福村出版，49-51.

岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修（1995）発達心理学辞典．ミネルヴァ書房，24-25.

大島美絵・藤野博（2001）聴覚障害幼児における象徴遊び―Symbolic Play Testによる検討―．聴覚言語障害，30(2-3)，47-54.

Slade, A. (1987) A longitudinal study of maternal involvement and symbolic play during the toddler period. *Child Development*, 58, 367-375.

外山紀子（2005）象徴遊び．中島義明・繁桝算男・箱田裕司（編），新・心理学の基礎知識．有斐閣ブックス，336.

Spencer, P. E., Deyo, D. and Grindstaff, N. (1991) Symbolic play behaviors of normally developing deaf toddlers. In D. S. Martin (Ed.), *Advances in cognition, education, and deafness*. Gallaudet University Press, Washington, D. C., 216-222.

高橋たまき（1984）乳幼児の遊び　その発達プロセス．新曜社.

武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・斉藤こずゑ（1984）言語行動の発達（Ⅶ）母子相互作用における動作と言語（生後3年間の縦断観察資料の分析）．東京大学教育学部紀要，24，61-80.

田中みどり（1996）遊びとことば．高橋たまき・中沢和子・森上史朗（編），遊びの発達学　展開編．培風館，21-37.

戸田須恵子（1996）遊びとことば．高橋たまき・中沢和子・森上史朗（編），遊びの発達学　展開編．培風館，56-79.

Wedell-Monnig, J. and Lumley, J. M. (1980) Child deafness and mother-child interaction. *Child Development*, 51, 766-774.

Westby, C. E. (1991) A scale for assessing children's pretend play. In C. E. Schaefer, K. Gitlin, & A. Sandgrund (Eds.), *Play diagnosis and assessment*. John Wiley & Sons, 131-161.

――2007. 8. 31受稿，2007. 11. 19受理――

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

J. J. Disa. Sci. 32, 11－19, 2008

Symbolic Play and Mother-Child Interaction in Hearing Impairment Children

Chie TATEYAMA*, Inho CHUNG* and Sueo MATSUMOTO**

The present study examined developmental trends and characteristics of symbolic play and mother-child interaction for preschool hearing impaired children. Participants were 28 congenital hearing impaired children of 2 to 4 years old and their main communication method was oral. The analysis of mother-child interaction revealed that symbolic play in preschool hearing impaired children reached the same level compared with hearing children by 3 years old, although 2 years old children had some lags compared with hearing children. The verbal interaction in hearing impaired children increased with ages. The nonverbal interaction, however, was not changed. Some characteristic patterns as like onomatopoeia or oral imitation were shown in mother-child interaction of preschool hearing impaired children.

Key Words：symbolic play, hearing impaired children, mother-child interaction

* Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
** School for the Deaf, University of Tsukuba

NII-Electronic Library Service